

「装着型産褥子宮モデル」を使用した学習効果 —看護学生による子宮復古の観察から—

山本 真由美 渡邊 由加利 山内 まゆみ 森川 由紀
石引 かずみ 宮崎 みち子

札幌市立大学看護学部

抄録：本研究の目的は、開発した「装着型産褥子宮モデル」を装着した模擬褥婦の子宮復古を看護学生が観察し、看護を実践することによる学習効果を明らかにすることである。対象はA大学看護学部の3・4年生で研究協力を申し出た学生12名。調査期間は平成28年3月中旬。調査方法は(1)装着型モデルを装着した模擬褥婦(教員)に対し、学生が子宮復古状態を観察した。(2)終了後、学生に面接調査を行った。その内容は観察内容(触診、計測診、問診、視診、患者の反応)および装着型モデルに関する感想であった。分析方法は面接内容を逐語録に変換し、学習効果に関連したデータを質的に分析した。倫理的配慮は研究代表者所属先の倫理審査委員会の承認(No. 1529-1)を得て実施した。学習効果に関連したカテゴリーは「子宮復古の観察ができる」、「褥婦の反応を確認・配慮しながら観察ができる」、「判断しながら技術が実施できる」、「実習に類似した環境で実施できる」、「実施の振り返りができる」が生成された。今回装着型モデルを使用することで、対象者に接する際に反応を観察しつつ、判断を加えながら実施していた。子宮復古の観察は、下腹部という日常生活では他者が触れない部位を触診するため、対象者の羞恥心に配慮し、その反応も観察しながら実施する必要がある。開発した装着型モデルは臨床場面により近づいた中での学習が可能であることが示唆された。

キーワード：看護基礎教育、母性看護学、技術教育、装着型産褥子宮モデル、教材開発

Evaluation of learning effects using a “wearable fetus and uterus model”: Observation of uterus involution by nursing students

Mayumi Yamamoto, Yukari Watanabe, Mayumi Yamauchi, Yuki Morikawa,
Kazumi Ishibiki, Michiko Miyazaki
School of Nursing, Sapporo City University

Abstract: This study aims to determine the learning effects with nursing students in the nursing practice where nursing students observed uterus involution of a simulated patient (SP) wearing a “wearable fetus and uterus model” developed for this study (wearable model). Participants were 12 students from the third and fourth years in the nursing department of A university, who had volunteered to participate in the study. In the study conducted in the middle of March, 2016, students observed the condition of uterus involution of the SP wearing the “wearable model”, and we conducted interviews with the students after the observation. Students were asked about the particulars of their observations, and about impressions of the wearable model. The records of the interviews were transcribed and data related to learning effects were analyzed qualitatively. This study was conducted with the approval of the ethics committee of the university the principal author is affiliated with (No. 1529-1). The analysis yielded the following response categories: abilities to ‘observe uterus involution’, ‘make observations

while paying attention to and observing the response of the SP', 'use skills relevant to the conditions observed', 'conduct observations in an environment similar to clinical training', 'assess the self-care skills of the SP', and 'look back on the practices involved'. The students conducted the observations of uterus involution using a wearable model while assessing the responses of this SP. The wearable model developed here may provide an effective learning environment similar to that in clinical settings.

Keywords: Basic nursing education, Maternity nursing science, Education in nursing skills, Wearable fetus and uterus model, Development of teaching materials

1. 緒言

看護教育を取り巻く状況として、平成14年に文部科学省が「大学における看護実践能力の育成に向けて」(看護学教育の在り方に関する検討会)を提示した後、看護実践能力に視点が置かれるようになった¹⁾。しかし、医療がさらに高度化し在院日数が短縮化し、国民の医療安全に関する意識が向上したことなど、臨地実習で実施できる看護技術の範囲や機会が制約されてきた。そのため、看護基礎教育における実践能力の強化がより一層求められてきた。平成19年「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」(看護基礎教育の充実に関する検討会)では、学生の看護実践能力を高めるという観点から、効果的な教育方法について提言している。その中で、各種の看護技術を実際に近い状態で適用できるようにするために臨床場面を疑似体験できるような用具や環境の整備は、学生の実践能力を向上させる有用な方策である²⁾とされている。また、平成23年に「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」(看護教育の内容と方法に関する検討会)においても、看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法として、学内でシミュレーション等を行うなど臨地実習に向けて準備をしておくことの重要性が示されている³⁾。

一方、平成27年に厚生労働省医務看護課長の連絡として、「母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について」において、近年の少子化の進展に伴い、病院以外の実習施設も実習に含めることができることや、臨地実習を充実させるために、実践活動の場以外で行う学習の時間を、臨地実習に含めても差し支えないこととし、その具体例が示された⁴⁾。つまり、母性看護学領域ではより学生の看護実践能力の育成に努力が求められているといえる。

札幌市立大学では平成18年の開学以来、これからの大学生に獲得してほしい看護学の内容として実践的に看護を学ぶことを重要視し、看護教育を実践してきた。その一つの教育評価方法として、客観的臨床能力試験(Objective structured clinical

examination : 以下, OSCE) がある⁵⁾。

母性看護学領域においても、OSCEを実施しており、その時々で課題を明確にし、次年度の教育へ活用してきた。平成24年・25年度はOSCE課題を「子宮復古¹⁾の観察」として取り組んだ。平成24年度は子宮底をメジャーで正確に計測する技術の評価点が低い状況にあった。その結果を受け、平成25年度には演習で強化し、子宮底計測は評価点が上昇した。一方、評価項目「下着を下げ測定部を露出した」では評価点が低下する結果となった。これは、教育用模型「産褥²⁾子宮触診モデル」(以下、教育用模型)では抵抗なく確実に下着を下げ計測部を露出できたが、模擬患者の下着を下げる際には遠慮が生じたことで露出不足につながったと推察した⁶⁾。これらの経過から、学生が対象者の反応を確認しながら、看護技術が適切に実施できるような教材の工夫が課題となり、平成26年度に「装着型産褥子宮モデル」(以下、装着型モデル)を製作した⁷⁾。

そこで本稿の目的は、開発した装着型モデルを用いて、装着した模擬褥婦⁸⁾の子宮復古を看護学生が観察し、対象者に看護することによる学習効果を明らかにすることである。

2. 用語の定義

1) 教育用模型「産褥子宮触診モデル」(写真1) : 株式会社高研が製作した産後の子宮収縮の状態を触診できる模型



写真1 「教育用模型」を用いた触診場面

2) 装着型産褥子宮モデル（写真2）：平成26年度に株式会社高研に業務委託をして製作した装着型の産褥子宮モデルを指す（なお、装着型モデルは平成26年度札幌市立大学共同研究費の助成を受けて製作した）



写真2 製作した「装着型モデル」

3. 研究方法

1) 研究期間および調査期間

(1) 研究期間：平成27年4月1日－平成28年3月31日

(2) 調査期間：平成28年3月

① 4年次生；平成28年卒業式前まで

② 3年次生；平成28年3月31日まで

2) 対象

札幌市立大学看護学部の3年次生と4年次生で、研究協力の同意が得られた看護学生（母性看護学臨地実習を終了した学生）

3) データ収集方法

対象者毎に、下記の方法(1)から(3)を繰り返す。

(1) 研究協力が可能な看護学生を募集する。

研究協力が可能な看護学生は研究代表者の研究室まで来訪してもらい、学業に支障がない調査実施日を決定したうえで、白衣を着用して調査室に来室するよう説明し、調査日に使用する課題を渡す。

課題内容は、「木下まりこさん(35歳、初産婦)は、3000gの男児を出産しました。分娩経過およびその後の産褥経過も良好でした。本日は産褥1日目です。前日の状態は、子宮底の高さが15.0cmで、

子宮底の硬さが硬いこと、悪露⁽⁴⁾の色が赤色で、その排出量がシナプキンに半分の量であった。また、今朝のバイタルサインズは正常であることを看護記録より情報収集済みです。今から木下さんの子宮復古状態を観察してください。①子宮底の触診、計測診、問診、技術提供時の褥婦の反応を観察してください。②悪露の状態を口頭で確認してください。③そばにいる指導者役の教員に、子宮復古状態を報告してください。※この課題は、OSCEではありません。また、看護学生の看護技術を評価するものでもありませんので、看護実践中に何か困ったと思ったら指導者役の教員に気軽に相談してください」である。

(2) 装着型モデルを装着した模擬褥婦（教員）に対し、看護学生が産褥復古状態の観察を実施してもらう。その場には、指導者役の教員が同席する。

(3) 看護実践終了後、看護学生に対し、面接調査を実施する。

(4) 面接内容はインタビューガイドに基づき、①何が観察できたか、②対象者の健康状態は判断できたか、③観察する上で、困ったことや悩んだことなどがあつたか、④母性看護技術学で使用したモデルとの違いはあつたか、などであつた。

4) 分析方法

面接調査の内容を以下の方法で分析した。

(1) 対象および面接時間は単純集計した。

(2) 面接内容はデータを逐語録に起こし、研究目的に沿って文脈を抽出し、意味内容に留意しながら意味のまとまりで分類し、カテゴリーを抽出した。

5) 研究における倫理的配慮

札幌市立大学の倫理委員会の承認（No.1529-1）を得て実施した。また、研究協力者には研究概要と倫理的配慮を文書ならびに口頭で説明し同意書に署名を得た。さらに、研究協力による心理的負担を軽減するために、事前実施する課題を提示した。

この研究に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

4. 結果

1) 対象者の属性

札幌市立大学看護学部3年5名, 4年7名, 計12名であった。面接時間は平均6分54秒であった。

実施状況を以下に示す(写真3, 写真4)。なお,



写真3 装着型モデルを用いての子宮底の計測場面

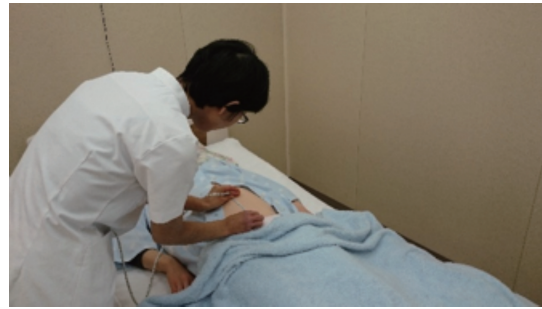


写真4 模擬褥婦へ対応をしながら計測する場面

2) 装着モデルを使用した学習効果

面接調査で得た逐語録から研究目的に関連する120の文脈単位を抽出した。意味内容のまとまりから11のサブカテゴリーと6のカテゴリーを抽出した。

以下の結果は、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを[], コードを《 》で示す。

表1 装着型モデル使用時の学習効果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子宮復古の観察ができる	子宮底の観察ができる	子宮底の高さが観察できた 子宮底の硬さが観察できた 子宮の触れ方が理解できた 膝の曲げ伸ばしを意識して実施できた
	子宮底の計測ができる	恥骨結合が観察できた 子宮底が計測できた メジャーでの計測を学べた
	問診により子宮復古状態の確認ができる	悪露の状態・量・臭いを聞いた 後陣痛の有無を聞いた 話す中で情報を得た
	問診により子宮復古の促進要因を確認できる	排泄を聞いた 食事摂取を聞いた 会話から休めていることがわかった
判断しながら技術が実施できる	判断しながら技術が実施できる	正常な経過をたどっている 前日より子宮収縮がよくなっている 問診内容と合わせて判断している 状態を考えながら問診した 実践しながら判断している
褥婦の反応を確認・配慮しながら観察できる	褥婦の反応を確認しながら子宮復古の観察ができる	技術を実施しているときの表情・反応を観察できた 痛みがないかを顔を見て観察できた 触診の強さ、不快を与えていないかを観察できた 目線を見て問診できた 寝衣をどこまで外すのかをさぐりながら実施した
	褥婦の立場や気持ちを考えることができる	腹部を押されている感じがわかる 褥婦の気持ちを考えることができる ショーツを下げるときに気持ちを考えた
実施の振り返りができる	実施の振り返りができる	情報不足で判断できていないとわかった
褥婦のセルフケア能力を確認できる	褥婦のセルフケア能力を確認できる	褥婦自身が悪露を確認していた 褥婦自身が子宮をどのように確認しているかわかった 褥婦と一緒に触って確認できた
実習経験に類似した環境で技術が実施できる	実習に近い状態で技術が実施できる	臨床と同じような環境でできる 声掛けを意識できた 実際の褥婦を想定して練習できる 実際に近いので実習でも困らず実技ができる 実習と同じ緊張感で行うことができる
	褥婦と会話ができる	実際に人に付いていたので自然とできた 話しかけると返答が返ってきて実施できる 実習のときの会話に近いと思う

6 カテゴリーが形成された (表 1)。

【子宮復古の観察ができる】は、[子宮底の観察ができる]、[子宮底の計測ができる]、[問診により子宮復古状態の確認ができる]、[問診により子宮復古の促進要因が確認できる]の4つのサブカテゴリーから形成された。

【判断しながら技術が実施できる】は、[判断しながら技術が実施できる]の1つのサブカテゴリーから形成された。

【褥婦の反応を確認・配慮しながら観察できる】は、[褥婦の反応を確認しながら子宮復古の観察ができる]、[褥婦の立場や気持ちを考えることができる]の2つのサブカテゴリーから形成された。

【実施の振り返りができる】は、[実施の振り返りができる]の1つのサブカテゴリーから形成された。

【褥婦のセルフケア能力を確認できる】は[褥婦のセルフケア能力を確認できる]の1つのサブカテゴリーから形成された。

【実習経験に類似した環境で実施できる】は、[実習に近い状態で実施できる]、[褥婦との会話ができる]の2つのサブカテゴリーから形成された。

5. 考察

母性看護学の特徴は健康レベルやセルフケア能力が高く、自己決定権を持つ対象者に看護することである。また、リプロダクティブヘルスの維持・増進を目的にすることから、生殖器に関連する観察が多く、看護を提供する際の対象者への配慮は重要となる。

以下に、子宮復古の観察技術および看護実践能力の学習効果について述べていく。

1) 子宮復古の観察技術の学習効果

(1) 【子宮復古の観察ができる】

正確な子宮復古の観察は、産褥期の対象者の状態をアセスメントする上では重要な技術である。褥婦にとって自らの身体回復が遅れることは、育児技術修得の遅れにつながる。装着型モデルを用いて子宮復古の観察を行ったことで、《子宮底の高さ》、《子宮底の硬さ》および《恥骨》が確認できている。また、正しく計測できるための原則である《膝の曲げ伸ばしを意識する》ことができ、《メ

ジャーでの計測を学べた》と感じている。さらに、正確な計測だけではなく、[問診により子宮復古状態]および[子宮復古の促進要因が確認]できている。これは、対象者に確認しながら、確実に技術が修得できるという装着型モデルの学習効果といえる。

(2) 【判断しながら技術が実施できる】、【褥婦の反応を確認・配慮しながら観察できる】

装着型モデルを用いたことで、《前日より子宮収縮がよくなっている》、《状態を考えながら問診した》など、【判断しながら技術が実施】できた。また、《技術を実施しているときの表情・反応を観察できた》ことや、《触診の強さ、不快を与えていないかを観察できた》ことから、【褥婦の反応を確認】しながら技術を実施できた。さらに《褥婦の気持ちを考えることができた》、《ショーツを下げる時に気持ちを考えた》などから、【褥婦の反応を配慮】しながら技術を実施できた。看護は認知領域だけではなく、情意領域および精神運動領域を統合させながら技術を実施していくことが求められる。既存の教育用模型では、正確な子宮底計測の技術修得は可能であるが、対象者から情報を得ることは難しかった。そのため、様々な教育方法が検討されてきた^{8~10)}。しかし、装着型モデルを使用することにより、知識を活用し判断しながら、対象者が置かれている状況に配慮しつつ技術を実施できたといえる。つまり、認知・情意・精神運動領域を総合的に活用した学習経験になったと考える。

(3) 【実施の振り返りができる】

学生は子宮復古を観察しながら、《情報不足で判断できていないとわかった》と自らの実践過程を振り返ることができた。看護実践におけるリフレクションおよび省察の効果は、実践知への気づき、看護実践能力の向上および専門職者としての成長につながる¹¹⁾。つまり、自分が実施した過程を振り返ることは実践知となり、この経験を繰り返すことで、子宮復古の観察技術が上達し、看護実践能力の向上につながるものと考えられる。

(4) 【褥婦のセルフケア能力を確認できる】

《褥婦自身が悪露を確認していた》、《褥婦自身が子宮をどのように確認しているかわかった》など、学生は褥婦が自分の子宮復古状態を把握していることを、対象者と接することで確認できた。先にも述べたが、母性看護学はセルフケア能力の高い対象者に看護する特徴がある。装着型モデル

を使用することで、対象理解を深める一助になるものと考える。

(5) 【実習経験に類似した環境で技術が実施できる】

《実際に近いので実習でも困らずに実技ができる》、《実習と同じ緊張感で行うことができる》、《声掛けを意識できた》など、[実習に近い状態で技術が実施]できた。また、[褥婦と会話ができる]ことから、【実習経験に類似した環境で技術が実施】できた。学生にとり、臨地実習は緊張状態であり、ストレスの多い経験¹²⁾ではあるが、看護を学修する上では欠かせない経験である。実習前に装着型モデルを用いることにより、心理的に安全な環境下で技術修得に向け、反復した練習を行うことが可能となる。そうすることで、“対象者とコミュニケーションを取りながら、自分は観察できる”といった自己効力感を持ちながら、実習に取り組むことができる。したがって、装着型モデルを用いた教育は、認知・情意・精神運動領域を統合したシミュレーション学習なるため、看護実践能力の向上¹³⁾¹⁴⁾に有用であると考える。

2) 看護実践能力の学習効果

(1) 学士課程におけるコアとなる看護実践能力

看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告書では、学士課程においてのコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標を設定している。

【子宮復古の観察ができる】はⅡ根拠に基づき看護を計画的に実践する能力の中の5) 計画的に看護実践する能力および9) 看護援助技術を適切に実施する能力に該当する。

【判断しながら技術が実施できる】、【実施の振り返りができる】はⅡの4) 根拠に基づいた看護を提供する能力および9) 看護援助技術を適切に実施する能力に該当する。

【褥婦の反応を確認・配慮しながら観察できる】は、Ⅰヒューマンケアの基本に関する実践力の中の1) 看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する能力および3) 援助的関係を形成する能力に該当する。

【褥婦のセルフケア能力を確認できる】は、Ⅱの6) 健康レベルを成長発達に応じて査定する能力に該当する。

学生が【実習経験と類似した環境で実施できる】と感じたように、実習経験以外でも装着型モデルを使用することでコアとなる看護実践能力を育成することにつながる環境を提供できるものと考え

る。

戸田は看護実践能力を、看護過程を展開していく能力および構造化していく能力と規定している。看護過程を展開していく能力は、①観察能力、②対象認識能力、③立場の変換能力、④表現能力、⑤感性的自己評価能力としている。また、看護過程を構造化していく能力は、⑥理性的自己評価能力としている¹⁵⁾。

以下に、本研究結果と戸田の①から⑥の関連を表す。【子宮復古の観察ができる】、【判断しながら実施できる】は、対象の事実から意味ある事実を捉えることができるという観察能力といえる。また、問診することで対象が持つ事実の意味を考えることになり、対象特性をつかむことができるようになる対象認識能力を意味していると考える。【褥婦の反応を確認・配慮しながら観察できる】は、対象の反応を観察することによって、自己の実践を評価できるようになる感性的自己評価能力である。また、配慮することは対象の感情を読み取ることができるようになる立場の変換能力であると考える。さらに、【褥婦のセルフケア能力を確認できる】は、対象のもてる力を引き出すように判断して働きかけことができるようになる表現能力につながるのではないかと。最後に、【実施の振り返りができる】は、自己の看護過程を評価できることになり、理性的自己評価能力といえる。つまり、5つのカテゴリーは戸田のいう看護実践能力を表しているといえる。

(2) 学士課程教育の「学士力」育成

中央教育審議会答申の「学士課程教育の構築に向けて」では、各専攻分野を通じて培う学士力が示されている。その中の「汎用的技能」では、コミュニケーション・スキル、論理的思考力などが学習成果の一つと言われている。また、「態度・志向性」では倫理観などがあり、「統合的な学習経験と創造的思考力」では、知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用する能力が必要であると述べている¹⁶⁾。装着型モデルを用いたことで、コミュニケーション力が養われ、知識・技術・態度を総合的に活用できる経験となる。さらに、自ら実施した技術を振り返ることで新たな課題を明確にすることにつながる。これらは看護学分野における「学士力」の育成、つまり看護を実践する能力を養うことにつながるものと考える。

6. 本研究の限界

本研究は対象者が12名であったため、データ数が少ないことが限界である。今後はデータ数を増やしてさらに装着型モデルの学習効果を明らかにしていきたい。

7. 結論

- 1) 装着モデルを用いた学習効果は、【子宮復古の観察ができる】、【判断しながら技術が実施できる】、【褥婦の反応を確認・配慮しながら観察できる】、【実施の振り返りができる】、【褥婦のセルフケア能力を確認できる】、【実習経験に類似した環境で実施できる】の6カテゴリーが抽出された。
- 2) 装着型モデルを用いることで、学士課程におけるコアとなる看護実践能力を育成することの一助となる。
- 3) 装着型モデルを用いて学習することで、「学士力」育成の一助となる。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究への参加を承諾くださった学生の皆様に心より感謝の意を表す。

本研究は第36回日本看護科学学会学術集会に発表した研究に加筆、修正し、新たな内容を加えたものである。

注

- (1) 子宮復古：妊娠中に増大した子宮が、分娩後4～6週で、非妊時の大きさに回復することを指す。
- (2) 産褥：妊娠・分娩によって生じた母体の変化が、妊娠前の状態に戻るまでの期間を指す。
- (3) 褥婦：産褥期間にある婦人を指す。
- (4) 悪露：産褥期に子宮腔内や産道から排出される分泌物を指す。

文献

- 1) 文部科学省：看護学教育の在り方に関する検討会：大学における看護実践能力の育成に向けて2002. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm 2016年10月1日（アクセス日）
- 2) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書2007. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> 2016年10月3日（アクセス日）
- 3) 文部科学省：看護教育の内容と方法に関する検討：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書2011. <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbiu.pdf> 2016年10月3日（アクセス日）
- 4) 厚生労働省：母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について2016. https://www.hospital.or.jp/pdf/15_20150901_02.pdf 2016年10月14日（アクセス日）
- 5) 中村恵子編：看護OSCE. メヂカルフレンド社、東京、2011
- 6) 山本真由美, 多賀昌江, 山内まゆみ, 渡邊由加利, 石引かずみ, 宮崎みち子：客観的能力試験(OSCE)を用いた「子宮復古の観察」技術修得状況と課題-2年間の試験結果の評価-. 第55回日本母性衛生学会学術集会抄録集, 227, 2014
- 7) 山本真由美, 山内まゆみ, 渡邊由加利, 多賀昌江, 石引かずみ, 羽深久夫, 宮崎みち子：産後の子宮触診技術に活用できる「装着型産褥子宮モデル」の開発. 札幌市立大学研究論文集10(1)：31-37, 2016
- 8) 山下貴美子, 伏見正江, 森越美香, 坂上玲子, 佐野千栄子：母性看護学臨地実習ストラテジーに向けた教授方法の工夫-シミュレーション学習効果を通して-. 山梨県立看護大学短期大学部紀要12(1)：67-76, 2007
- 9) 礪山あけみ, 板間伊津美, 渋谷えみ, 小松美穂子：産褥期の母子に対する看護実践能力を高めるための映像型教材の開発. 茨城キリスト教大学看護部紀要6(1)：63-70, 2014
- 10) 勝田真由美, 工藤里香, 西村明子, 末原紀美代：模擬患者を対象にした母性看護技術演習の学習効果. 兵庫医療大学紀要1(1)：57-68, 2013
- 11) 新垣洋美, 岩脇陽子, 柴田明美, 滝下幸栄, 山中龍也：看護実践におけるリフレクションによる効果に関する文献検討. 京都府立医科大学看護学科紀要25：9-18, 2015
- 12) 中本明世, 伊藤朗子, 山本順子, 松田藤子,

- 門千歳, 横溝志乃: 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難間の比較基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して. 千里金蘭大学紀要 1: 123-134, 2015
- 13) 村井嘉子, 堅田智香子, 加藤亜妃子, 彦聖美, 藤田三恵, 田村幸恵, 丸岡直子, 川島和代: 看護実践力の向上を支援するためのシナリオ学習教材の開発. 石川看護雑誌 8: 93-101, 2011
- 14) 村本淳子, 二村良子: 看護教育と OSCE. 大滝純司編, OSCE の理論と実際. 篠原出版新社, 東京, pp. 83-90. 2007
- 15) 戸田肇: 連載看護実践を育む, 1 看護実践能力とは. Quality Nursing9(4):61-69, 2003
- 16) 文部科学省: 中央教育審議会大学分科会: 学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ) 2008. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm 2016 年 10 月 14 日 (アクセス日)